

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第3章 ヨシュアからサウル王までの時代④



サムソン・イスラエルの子ら

サムソン

寄異に思われるかもしれませんが、聖書にサムソンの祈りとして記録されているものは、死の直前に祈ったものを除けばただ一つしかありません。ろばのあごの骨で千人のペリシテ人を殺した後、渴きを覚え、疲れたサムソンは主に呼ばわっています。「あなたは、しもべの手で、この大きな救いを与えられました。しかし、今はのどが渇いて死にそうで、無割礼の者どもの手に落ちようとしています」（士師 15:18）。

ここに、その荒々しさの甚だしいがゆえにその名が今なお超人的な力と同義語として用いられている人物の姿があります。ここに、その顕著な信仰のゆえにヘブル人の手紙におけるかの有名な信仰の章において一つの場所を与えられるところになった(11:32)人物の姿があります。しかしながら、サムソンはまた、人格的な自堕落さのために恥を受け、盲目にされ、鎖につながれることになってしまった人物でもあります。なぜなのでしょう。彼は祈らなかったことで身を持ち崩してしまったと言えるのでしょうか。



サムソンは、どうすれば神の御霊に自らを明け渡すことができるかを知っていました。どうすれば人並み外れた信仰を働かせることができるかを知っていました。ところが、どうすれば肉体的な欲望を抑えることができるかは知りませんでした。そして、明らかに、祈りという、そこにある道具をうまく用いることができていませんでした。というのも、つまるところ、「彼は主が自分から去られたことを知らなかった」（士師 16:20）とあるからです。イエスは人間の性質の弱さをご存じでした。それで、弟子たちに次のようにお語りになりました。「**誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです**」（マタイ 26:41）。神を信じる人は、誰もがこのことを心に留め、気をつけるようにしたいものです。

サムソンの最後の言葉は、神に向けられたものでした。彼はここに至るまでに見るも無残な状態に至ってしまっていたましたが、自分の力の源についてはまだわかっていました。

「神、主よ。どうぞ、私を御心に留めてください。ああ、神よ。どうぞ、この一時でも、私を強めてください。私の二つの目のために、もう一度ペリシテ人に復讐したいのです」…そしてサムソンは、「ペリシテ人といっしょに死のう」と言って、力をこめて、それを引いた。（士師記 16:28,30）

神の罰は厳しいものでしたが、それは最終的に、平和的な義の実を結ばせるものとなりました。恐ろしい方法で盲目にされ、鎖につながれ、奴隷とされ、ガザの牢獄において屈辱を味わわされたことを通して、イスラエルのこの力強い士師は悔い改めを余儀なくされ、母の胎の中にいる時から自分を聖別してくださっていた神との関係を新たにされました。彼は再び、豊かに用いられる立場に置かれたのでした。そして、神に答えていただける祈りを行うことができるようになり、それまでの生涯を通じて成し遂げたいかなる偉業にも優る形で、神の敵を倒すことができたのでした。祈りこそ、刷新と回復の鍵なのです。

イスラエルの子ら

ここまで、私たちは様々な人物の祈りに注目してきました。しかし、イスラエルが集団で捧げている祈りが記録されている中でも、注目すべきものがあります。次に挙げる箇所は、士師記 19 章、20 を背景に読むべきもので、ベニヤミン族の不品行に対処すべくイスラエルが神の導きを求めている箇所です。

イスラエル人は立ち上がって、ベテルに上り、神に伺って言った。「私たちのため、だれが最初に上って行って、ベニヤミン族と戦うのでしょうか。」すると、主は仰せられた。「ユダが最初だ。」(20:18) (ベニヤミン族に完敗を喫した後、イスラエルの人々は再び祈りました。) そしてイスラエル人は上って行って、主の前で夕方まで泣き、主に伺って言った。「私は再び、私の兄弟ベニヤミン族に近づいて戦うべきでしょうか。」すると、主は仰せられた。「攻め上れ。」(20:23) (再び大敗を喫した後、イスラエルの人々は断食をし、神のみこころを求めました。) 「私はまた、出て行って、私の兄弟ベニヤミン族と戦うべきでしょうか。それとも、やめるべきでしょうか。」主は仰せられた。「攻め上れ。あす、彼らをあなたがたの手に渡す。」(20:28)

祈ったことに対して主からの導きをいただいたという感じを受けていながら失敗してしまうということは、理解の難しいことではありますが、神の子どもたちとしては他人事ではありません。そのようなときには、性急に神を責めるべきではありません。 **さらに真摯にみこころを求めるべきです。そうすれば、イスラエルに起こったように、失敗はさらに優れた成功の前触れとなるのです(20:46 を参照)。**

表面的には、イスラエルの祈りは実に奇妙なものに思われます。最初の敗北を喫した後、「私は再び、私の兄弟… に近づいて戦うべきでしょうか」という祈りがなされており、神の答えはそうにせよというものでした。ところが、それが第二の敗北につながったわけです。神の答えは、まさに理解困難なもので、その御性質とは相容れないものであるかのように思われます。しかし、私たちは、神が目指しておられることは人間の判断の中に収まるものではないということを理解しなければなりません。神の世界においては、神に徹底的により頼むということを学ぶ必要があるのかもしれない。例えば神は、イスラエルの人々の中に(ベニヤミン族の中にも同様に)何か取り除かなければならないものをご覧になっていたのかもしれない。さもなくば、全体がだめになってしまったのかもしれない(I コリント 5・5-7 を参照)。神の、何よりも高い目的は、神が事を可能にしてくださることによってのみ達成されるのです。

そこで、民はベテルに来て、そこで夕方まで神の前にすわり、声をあげて激しく泣いた。そして、彼らは言った。「イスラエルの神、主よ。なぜイスラエルにこのようなことが起こって、きょう、イスラエルから一つの部族が欠けるようになったのですか。」(士師記 21:2-3)

ベニヤミン族の災いに対するイスラエルの大きな悲しみと落胆を見ると、彼らが部族間に結んでいた契約の絆に対する心配を見てとることができます。残されたベニヤミン族の人々のために妻を確保しようとして彼らがしたことは残酷に思われますが、少なくとも彼らは、それが必要だと思ったのです。それに対して聖書は、それが神の導きではなかったことを明記しています。次のようにある通りです。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」(士師 21:25)。

? 質問

1. サムソンはどんな特徴をもった人物であったとまとめられていますか？
2. 私たちは、サムソンの失敗から教訓を学び、どのようなことに心を留めたらよいと思いますか？ 肉体の弱さに負けずに祈るにはどうしたらよいとあなたは思いますか？
3. サムソンが、最後に神との関係を回復し、再び神に用いていただいたのはなぜですか？
これまでの状況がどうであれ、あなたが再び神に用いていただくためにはどうしたらよいと思いますか？
4. 祈ったことに対して主から導きをいただいたと感じていたのに、実際にはイスラエル人は失敗してしまいました。あなたにもこのような経験がありますか？
このような出来事をどう理解したらよいと思いますか？
5. 神はイスラエル人の祈りにこたえて、何をすることを目指しておられたと思いますか？
神はあなたの祈りを聞いて、どのように答えようとしておられると思いますか？



祈り

主なる神さま。様々な弱さ、誘惑、戸惑いがあっても、あなたに向かって祈り求めることをやめることはありませんように。祈りによって、失われたものが回復し、弱っていたところが強められ、私たちの生活の中であなたのみこころが実現しますように。